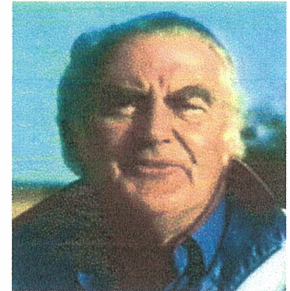


2章 アフリカの歴史

「たいていの女性にとって、HIV 感染の主な危険要因は、結婚していることである」という悲劇や「死にゆく大陸」の惨状が生み出された原因を探るために、アフリカの歴史を見てみる必要があります。

今回は「スウェーデンのアフリカ・グループ」が出版した『アフリカの闘い』 *The Struggle for Africa* (London: Zed Press, 1983) と、1983 年に NHK で放映された、英国人歴史家バズウル・デヴィドスンが語る英国 MBTV 制作「アフリカ 8 回シリーズ」を軸に、ルネッサンス以降の西洋諸国によるアフリカ侵略の歴史を概観したいと思います。



奴隷貿易

デヴィドスンは、ルネッサンス以前のヨーロッパ絵画を紹介し、白人優位・黒人蔑視の風潮を「比較的、近代の病なのです」と指摘しながら、つぎのように語ります。

18 世紀、19 世紀のヨーロッパ人は、祖先の知識を受け継ごうとはしなかったようです。それ以前のヨーロッパ人は、例えば西アフリカに、中世ヨーロッパにひけをとらない立派な王国がいくつもあることをよく知っていました。しかも、そうした王国を訪れた貿易商人や外交官の報告には、人種的な優越感をおおわせる態度は全く見られません。人種差別というのは、比較的、近代の病なのです。この違いを何よりよく語っているのは、ルネッサンスまでのヨーロッパ絵画です。ここには、黒人と白人が対等に描かれています。非常に未熟な人間という後の世の言葉を思わせるものではありません。美術の世界だけではありません。中世では、広く一般に、黒人は白人と対等に受け入れられていました。「アフリカシリーズ 第 1 回 最初の光 ナイルの谷」

西アフリカにヨーロッパ人が来るようになるのは 15 世紀の半ば頃からですが、最初は貢ぎ物と引き換えに、国王たちが許可を与えるという形で交易が始まりました。当時のヨーロッパ人は、その頃の王の権威や宮廷の華やかさを伝える記録を多く残しています。そのような王国の一つ、ベニン王国を千六百年頃に訪れたオランダ人は次のように書いています。

都は 30 の大通りが碁盤の目に交錯している。どの大通りも真っすぐで、大層広い。家は整然と並び、鏡のように磨きたてられている。清潔さという点では、この人たちは、オランダ人に少しもひけをとらない。立派な法律や警察組織もあり、住民は交易にきた外国人に極めて友好的であった。「アフリカシリーズ 第 3 回 王と都市」

ヨーロッパは八世紀から 15 世紀にかけて、急速な社会の発展を遂げますが、それでも、かなりの発達段階に達していた近隣のアフリカ諸国には多くの点で劣っていました。たとえば、1497 年に初めて喜望峰を回って北上したヴァスコ・ダ・ガマは、ペムバ、キルワ、モンバサなどの華やかな都市に目をみはっています。アラビア商人によってアフリカの内陸部やメソポタミヤ、ペルシャ、インド、中国を結ぶ黄金の交易網が張りめぐらされて、200 年に渡る繁栄を続けていたからです。ポルトガル人は東アフリカとの交易をもくろみますが、商品が劣っていたために相手にされませんでした。そこで、ポルトガル人は東海岸の貿易を独占するために掠奪を始めます。キルワの例をあげて、デヴィドソンが語ります。

その年、ヴァスコ・ダ・ガマが率いる小さなポルトガル船三隻が、歴史上初めて喜望峰を回り、インド洋へと入っていきました。ここにヨーロッパ人の侵略が始まります。ポルトガルへ戻ったガマは、旅先で目にしたものを報告しました。そして、7 年後の 1505 年、今度は前より大きな武装した船団が水平線に姿を現わしたのです。それに同行したドイツ人ハンス・マイルは、目撃したことをこう書いています
「ダル・メイダ提督は、軍人 14 人と 6 隻のカラブル船を率いてここに来た。提督は、大砲の用意をするように全船に命令した。7 月 24 日木曜未明、全員ボートに乗り上陸、そのまま宮殿へ直行し、抵抗するものはすべて殺した。同行した神父たちが宮殿に十字架を下ろすと、ダル・メイダ提督は祈りを捧げた。それから、全員で街の一切の商品と食料を掠奪し始めた。2 日後、提督は街に火をつけた」
「アフリカシリーズ 第 4 回 黄金の交易路」

こうしてヨーロッパ人のアフリカ侵略が始まります。ヨーロッパ人のねらいは、主に香辛料、布、金、象牙などでしたが、明らかに理不尽な侵略が出来たのは、火薬を人殺しの道具に使用した狡猾さ、相手にされないなら掠奪してしまえという侵略性、祈りを捧げてから掠奪や殺戮行為をなし得る傲慢さや残虐性などをヨーロッパ人が備えていたからでしょう。マルコムもヨーロッパ人の侵略性や残虐さを指摘し、中国で発明された火薬をヨーロッパ人が人を殺すための道具として使い出してから黒人が戦場で敗北し始めた、と言って、次のように続けます。

中国人は、火薬を平和な目的のために使いました。たしか、マルコ・ポーロだったと思いますが、マルコ・ポーロは火薬を手に入れて、ヨーロッパに持ち帰りました。そして、ヨーロッパ人はすぐにその火薬を人を殺すために使い始めます。ここが違う所です。ヨーロッパ人は、他の人たちが求めないものを必死になって獲ようとするのです。ヨーロッパ人は、殺すことが好きなんです、そう、本当にそうなんです。アジアやアフリカでは、食べ物のために殺します。ヨーロッパでは、楽しみのために殺すのです。そのことに気が付いたことはありませんか。あの人たちは血に飢えているんです、血が好きなんです。自分の血ではなく、他人の血が流れるの

を見るのが好きなんです。あの人たちは血に飢えています、昔のアジアやアフリカのどの社会でも、獲物を殺すのは、食べ物のため、楽しみのためではなかったのです……白人が黒人をリンチした話をよく聞きますが、黒人をリンチしながら、白人は刺激を得て、スリルを楽しんでいたんですよ。でも、あなた方も私も、殺すときは、食べ物のためか自分を守るためかのどちらかの必要性があるからなんです。そこのところをよく考えてほしいのです。(『マルコムX、アメリカ黒人の歴史を語る』28 ページ)



当初、ポルトガル人は海路と海岸線を支配しただけでしたが、ポルトガルに続いて、初めはオランダが、次にはイギリスとフランスが参入して、東海岸貿易の支配権をめぐって競争を繰り広げ、次第に本格的な侵略を開始していきます。

西海岸で海賊まがいの行為をしていたポルトガル人は、すでにアフリカ人を奴隷として本国に連れかえっていました。しかし、その規模は小さく、奴隷も権利は認められてはいなかったものの結婚も認められ、一般の貧しい人たちとそう変わらない生活を送っていました。奴隷貿易の性質や重要性を根本的に変えたのは、スペイン人による南アメリカ大陸の侵略です。栄えていたペルー、ボリビア、メキシコなどを武力で制圧したスペイン人の多くは、農民としてその地に留まり、そこに住んでいた人々を強制的に働かせました。しかし、病気や劣悪な労働条件に耐えられず、強制労働を強いられた人たちの大半が死んでしまいます。鉱山や農場での汚なくて辛い仕事をする労働者を必要としたヨーロッパ人は、その労働力をアフリカに求めました。ヨーロッパ人がアフリカに目を向けたのは、もちろん距離的に近かったこともありますが、当時、アフリカが鉱山技術でヨーロッパよりも優れていたために熟練した鉱山技師が少なからずいたからでもありました。

1518 年に、スペイン船が初めての積荷を直接アフリカからアメリカに運んだと言われています。それから 350 年に渡って、アフリカ人が奴隷として西インド諸島や北、南、中央アメリカに売られていきました。奴隷の 3 分の 2 は西アフリカから、残りの大部分はコンゴやアンゴラから連れ出されました。デヴィッドソンによれば、少なく見積もって 1500 万のアフリカ人が売買されたと言います。輸送の途中や、奴隷狩りやそれに伴う争いや飢きんなどの際に多くのアフリカ人が死んでいますから、おそらく被害者の数は、2000 万から、3000 万、あるいはそれ以上であったと考えられます。

奴隷貿易は「ヨーロッパで奴隷船に銃や布を積みこんでアフリカに向かう→アフリカで銃や布を奴隷に換え、奴隷船に積みこんでアメリカに運ぶ→アメリカで奴隷を売り、綿や砂糖、タバコなどの原材料を積んでヨーロッパに帰る→ヨーロッパで原材料をさばいて高利を得て、その利益を布や銃の製造にあて、再び布や銃を積みこんでアフリカに向かう」というヨーロッパ、アフリカ、アメリカの三点を結んで行なわれました。いわゆる三角貿易です。1977 年に全米を沸かしたテレビ映画「ルーツ」は、奴隷貿易の一部を画面に再現しましたが、ニューイングランドのアナポリス港に着い

た奴隷船の中で、奴隷を商うアンドルーズ商会の代理人ジョン・カリントンと奴隷船ロード・リゴニア号のデイヴィス船長が交わす次の会話は、三角貿易の内容を端的に示しています。

デイヴィス「ガンビア川の河口で、140人の奴隷をロード・リゴニア号に乗船させました」

カリントン「それは、ゆったりとした積み方で。それで……」

デイヴィス「そのうち、港に着いたときの生き残りは98人でした」

カリントン「98人。そうですか、それじゃ死んだのは3分の1以下ですな。入港した時に、生き残りが半分以下でも、まだかなりの利益があった奴隷商を私は何人も知っておりますよ。おめでとうございます、船長」

デイヴィス「一刻も早く積荷を下ろしたいのですがね」

カリントン「直ちに船を引いて行って、岸壁にお着けしましょう」

デイヴィス「船倉で燃やす硫黄の粉をぜひご用意いただきたい。もう一度、きれいになった船が見たいのです」

カリントン「それは、もう、船長。それから、船長はまた、ロンドンへ煙草を運んで行かれることになりますね」

デイヴィス「そして、ロンドンで……」

カリントン「ギニア海岸向けの貿易の品を、それから、またガンビア川に向けて」

デイヴィス「そして、もっとたくさんの奴隷を……」

カリントン「その通りですよ、船長。かくして天は我らにほほ笑みかけ、黄金の三角で点と点を結ぶ。煙草、貿易の品、奴隷、煙草、貿易の品など、永遠に限りなく。誰もが得をし、損するもの誰もなし、ですよ」

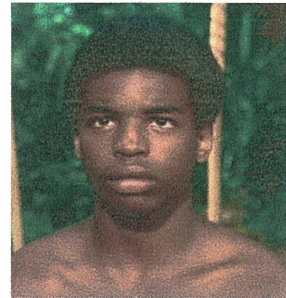


「誰もが得をし、損するもの誰もなし」の言葉どおり、奴隷船の船長をはじめ、奴隷商や奴隷を使う大農園主が暴利をむさぼりますが、これほど大規模な経済的不均衡が生じたことは、それまでにはおそらくなかったでしょう。奴隷貿易や奴隷制によって生じた偏った経済的不均衡によって、アフリカ社会は甚だしく疲弊し、西洋社会、特に米国と英国の金持ちは莫大な利益を獲得します。その利益は蓄積されて、やがて産業革命を引き起こす要因となるのです。

奴隷貿易や奴隷制によって生じたのは、経済的不均衡だけではありませんでした。それまであった交易の相手としての平等な関係は消え去り、白人優位・黒人蔑視の考え方が定着していきます。鎖につながれて船に運ばれるとき、あるいはアフリカからアメリカに向かう奴隷船の中で、あるいはアメリカの岸壁での競買で、アフリカ人は家畜並みの扱いを受けました。また、アメリカの農園では、アフリカ人とその子孫は、しばしば人間以下の扱いを受け、時には見るものが目をそむけたくなるような屈辱を味わいました。

奴隷貿易の最盛期に、初めて奴隷船に乗ったデイヴィス船長から、黒人についての質問を受けたスレイター1等航海士の次の話からも、黒人がどのように白人に考えられていたかの一端がうかがえます。

奴らは別の人種なんですよ、船長。人間が狩り用に犬を育てたり、女子供のペット用に育てたりするのに似ていますな。黒人っていう人種は、まあ、おつむの方は弱いんですが、体の方はいたって頑丈なんです。奴ら、奴隷にぴったりなんです。ちょうど、船長がこの船の船長にぴったりなように。自然の摂理ってやつですか。



奴隷貿易が激しくなるにつれて、ますますその考えは浸透していきました。

奴隷貿易によって苦しみを味わったのは、連れ去られたアフリカ人やその子孫だけではありません。残された人たちもまた、共同体の柱を奪われて深い苦しみを味わったのです。奴隷貿易の被害にあった地域は人的な資源を失なって、急速に疲弊していきます。そして、ヨーロッパから来た安い製品によって、それまでかなり発達していた手工業の技術も衰えていきました。

植民地支配

奴隷貿易によってもたらされた最大の変化は、蓄積された資本によって産業革命が可能になり、資本主義に向けての発達過程が早まったことです。おそらく、欲に目のくらんだデイヴィスもカリントンも、自分たちのやっている奴隷貿易が、後の世にそれほど大きな経済的、社会的変化をもたらすことになるとは、当時、夢にも思わなかったでしょう。

奴隷貿易やアメリカの鉱山や大農園の奴隷労働から得た多額の利潤を、自国の産業の発展のために投じるようになったヨーロッパの資本家は、徐々に力をつけて、それまで国を動かしていた奴隷商をしのぐようになり、奴隷制を廃止するに至ります。奴隷制よりも儲かる商売を見つけたというわけです。その人たちの関心は、産業のための原材料と労働者の低賃金を保障してくれる安価な食糧を確保することでした。

産業革命が最初に起こったのは、奴隷貿易で一番潤った英国でした。19世紀前半のことです。それまでは手で作っていたものを機械でつくるわけですから、かなり多くの製品が生産されるようになります。それでも、まだ、製品をさばくための市場の問題は起きていませんでした。しかし、19世紀後半になって状況は一変します。英国に続く他のヨーロッパ諸国と米国が、関税を引き上げて自国の産業を保護したために産業が巨大化し、余剰生産物を生み出す結果になったからです。つまり、消費者が買える以上の生産が可能になったのです。米国とドイツはなお、自国産業の保護政策を取り続けますが、英国とフランスは、生産拡大のための新しい市場を探さなければならぬ段階にまで産業が発達していました。そうした事態を打開してくれるのが、

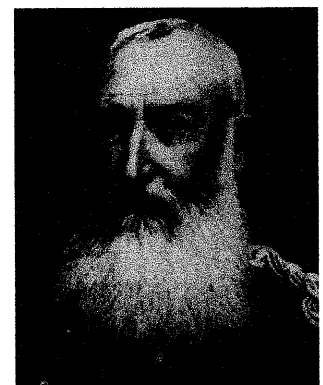
市場と原材料を確保してくれる植民地でした。こうして、ヨーロッパ列強によるいわゆるアフリカにおける植民地争奪戦が始まります。

アフリカ争奪戦はかなり激しいものとなり、戦争の危機さえはらむようになりますが、植民地を搾取するという共通の利害関係と、台頭しつつあった自国内の労働者階級への不安もあって、1884年から85年にかけて、西洋諸国が調停のために話し合いのテーブルにつきます。これがベルリン会議です。ヨーロッパ列強によって「正式に」アフリカが植民地として分割されたわけですが、実際は、すでに行なわれていた植民地争奪戦の結果を確認し合っただけに過ぎませんでした。

一番大きな分け前を取ったのは英国で、エジプト、ケニア、ナイジェリア、ゴールド・コースト（現ガーナ共和国）など一番いい場所を確保しました。次いでフランス、ドイツの順で、特に産業化のすすんだその三国で全体の80%を占めました。残りを、ベルギーとイタリア、それにポルトガルとスペインが分けてアフリカ分割が完了し、本格的な植民地支配が始まります。余剰製品を売りさばく市場を確保し、原材料の価格を思い通りに操作するためには、植民地内のアフリカ人を完全に掌握し、管理しなければなりません。支配の仕方は、その地域社会の発達段階によって異なりますが、中央集権化の進んだ地域では、その統治機構や支配者層をうまく利用しました。これがいわゆる間接統治で、進んだ地域を占領した英国は、おおむねこの支配形態を取りました。あまり発達していない地域を支配したフランスなどは、直接統治の形態を取りました。

一部の地域を除いて、各地でアフリカ人による強い抵抗運動がありますが、ヨーロッパ列強は資本と武器の力にまかせて強引にそれらの抵抗運動を鎮圧します。ドイツに支配された南西アフリカのように、大量虐殺に及んだ例も少なくありませんでした。植民地での搾取は苛酷を極め、直接統治によって1000万人以上もの人が殺されたと言うレオポルド二世のベルギー領コンゴの例などは特によく知られています。

多くの植民地では、農園や鉱山での労働者を獲得したり、植民地支配のための資金を得るために、強制労働や人頭税や小屋税などの税金、あるいは輸出用作物の耕作などの方法が取られました。アフリカ人は否応なしに貨幣経済に巻きこまれ、重い税金を払うために、あるいは巷にあふれるヨーロッパ製品を買うために、現金収入の道を求めて村を離れざるを得ませんでした。出稼ぎ労働者の誕生です。ほとんどの場合、短期間の契約労働の形が取られました。熟練した技術を覚えさせずに単純労働に従事させるには短期契約が一番都合がよかったからです。契約期間が切れたら、賃金のベースアップなしに、新たに他のアフリカ人を雇えばいいのです。あり余る出稼ぎ労働者は、低賃金を確保するにはもってこいのシステムでした。出稼ぎ労働者として村の働き手を奪われることで、旧来のアフリカ社会は完全に崩壊していきます。



レオポルド二世

また、多くの地域では輸出向けの換金作物を強制的に作らされました。セネガルのピーナッツ、ガーナのココア、タンザニアのコーヒーとサイザル麻、モザンビークの

綿などです。大体が単一の作物で、以前のように自分たちが食べるのではなく、宗主国の産業用だったのです。土地を休めずに連作を強いられて土壌が疲弊しただけでなく、それまでの自給自足の形態も根本から崩れて、のちの飢餓の要因となります。輸出価格を含め、植民地の経済は、完全に宗主国に支配されるようになりました。

一方、ヨーロッパでは、アフリカ人を幼稚で怠け者で救いようのない野蛮人と決めつけて、さかんに笑い者にしました。そうでもしなければ、国を取り上げて甘い汁を吸うことを正当化できなかつたでしょう。ありとあらゆる形で自らの侵略を正当化する試みがなされて、白人優位・黒人蔑視の考え方はしっかりと定着していきました。

新植民地支配

「白人同士が殺し合った」第1次、第2次世界大戦では、アフリカ人も駆りだされ、多くの犠牲者を出しました。しかし、両大戦で白人と共に銃を持って闘ったアフリカ人は「自分たちにもやれる」という自信を持ちました。戦争で荒れ果てた自国の復興に追われる西洋諸国を尻目に、アフリカは独立に向けて静かに動き始めます。

独立の先頭に立ったのは、宗主国のヨーロッパや米国に留学したことのある知識階級の若者たちでした。ブラック・アフリカでは、それまで模範的な植民地とされていたゴールド・コースト（現ガーナ共和国）が1957年に最初に独立を果たします。イギリスはあらゆる手段で独立を阻止しようとしませんが、大衆の圧倒的な支持を得たクワメ・エンクルマの勢いを止めることは出来ませんでした。時代の流れには逆らえず独立を許しますが、元植民地の利権を守るための新たな手口を考え出します。いったん独立を認め、形式的にアフリカ人に政治はやらせるものの、混乱に乗じてやがては軍事介入、実質的な経済力を握ってそれまでの利権を守るというやり方です。これが今も続く新植民地政策です。その意図は、エンクルマの次の自伝の一節からもはっきりと読み取れます。



遺産としてはきびしく、意気沮喪させるものであったが、それは、私と私の同僚が、もとのイギリス総督の官邸であったクリスチャンボルグ城に正式に移ったときに遭遇した象徴的な荒涼さに集約されているように思われた。室から室へと見まわった私たちは、全体の空虚さにおどろいた。とくべつの家具が一つあったほかは、わずかに数日まえまで、人びとがここに住み、仕事をしていたことをしめすものは、まったく何一つなかった。ぼろ布一枚、本一冊も、発見できなかった。紙一枚も、なかった。ひじょうに長い年月、植民地行政の中心がここにあったことを思いおこさせるものは、ただ一つもなかった。

この完全な剥奪は、私たちの連続性をよこぎる一本の線のように思えた。私たちが支えを見い出すのを助ける、過去と現在のあいだのあらゆるきずなを断ち切る、という明確な意図があったかのようであった。[クワメ・エンクルマ著野間寛二郎

氏訳『アフリカは統一する』（理論社、1971年）14ページ。]

結局、エンクルマは、1966年にベトナム戦争収拾の協力で極東に出向いている間に、クーデターを起こした軍部に失脚させられてギニアに亡命、6年後、失意のうちに病死するはめに陥りました。

ベルギー領コンゴ（現ザイール）の場合は、もっと悲惨です。1960年、ベルギー政府は、政権をコンゴ人の手に引き継ぐのに、わずか6ヵ月足らずの準備期間しか置きませんでした。ベルギー人官吏8000人は総引き上げし、行政の経験者はほとんどなく、36人の閣僚のうち大学卒業者がわずかに3人といった状態になります。その結果、独立後1週間もせずに国内は大混乱し、そこにベルギーが軍事介入、コンゴは「自治の能力なし」のレッテルを貼られてたちまち大国の内政干渉の餌食となりました。大国は、鉱物資源の豊かなカタンガ州（シャバ州）での経済利権を確保するために、首相パトリス・ルムンバの排除に取りかかります。危機を察知したルムンバは国連軍の出動を要請しますが、米国の援助でクーデターを起こした政府軍のモブツ大佐に捕えられ、国連軍の見守るなか、利権目当てに外国が支援するカタンガ州に送られて、惨殺されてしまいます。



独立は勝ち取っても、経済力を完全に握られては正常な国政が行なえるはずありません。名前こそ変わったものの、搾取構造は植民地時代とあまり変わらず、「先進国」産業の原材料の供給地としての役割を担わされているのです。しかも、原材料の価格を決めるのは輸出先の「先進国」で、高い関税をかけられるので加工して輸出することも出来ず、結局は原材料のまま売るしかないのが現状です。サイザル麻を作らされているタンザニアの元大統領ニエレレは次のように嘆きます。

第1次5ヵ年計画を準備していた当時、サイザル麻の価格はトン当たり148ポンドの高値でした。これは続くまいと考え、トン95ポンドの値を想定して計画を立てました。ところが、70ポンド以下に暴落です。私たちにはどうしようもありません。



原料生産者は、一体どうしたらいいのか。サイザル麻を作って売るしかありません。その価格が下がったら、もうお手上げです。苦しむのはいつも弱者です。「アフリカシリーズ 第8回 植民地支配の残したもの」

また、カカオが主要輸出品であるガーナのローリングス議長（後に大統領になります）は、怒ります。

ひどい話です。買い手が一方的にカカオの値段を決定する。昔はトン当たり 3500 ポンド。それが、今では 1000 ポンド。奴隷並みに働いて、カカオを差し出している。一方で、輸入品の値段は天井知らずに上がっているが、押しつけられ、慣らされて、今や、買わずにはいられない。「同シリーズ 第 8 回 植民地支配の残したもの」



第 2 次大戦後は、再進出の西ドイツと、米国、日本を加えた多国籍企業に経済を握られ、開発援助の名の下に累積債務は増えるばかり、より巧妙かつ複雑になった搾取構造の下で、アフリカ諸国は苦しんでいます。「先進国」の大幅な経済的譲歩がない限り、先の希望は望めそうにありません。その意味では、デヴィドスンのつぎの提言は、傾聴に値するでしょう。

飢えている国の品を安く買ったとき、自分の製品を高く売りつける。こんな関係が続いている限り、アフリカの苦しみは今後も増すばかりでしょう。アフリカ人が本当に必要としているものは何か。私たちは問い直すことを迫られています。

戦争、内乱、飢え、貧困、その中で、今、アフリカは何とか前進しようとしています。それを支えているのは、虐げられた歴史を覆した自信と未来に賭ける夢です。

奴隷貿易時代から植民地時代を通じて、アフリカの富を搾り取って来た先進国は、形こそ違え、今もそれを続けています。アフリカに飢えている人がいる今、私は難しいことを承知で、これはもうこの辺で改めるべきだと考えます。今までアフリカから搾り取ってきた富、今はそれを返す時に来ているのです。（「同シリーズ 第 8 回 植民地支配の残したもの」）

しかし現状は、先進国の大幅な譲歩どころか経済格差は開くばかりです。そこへエイズの追い打ちです。まさにアフリカは「死にゆく大陸」です。